

あるかもしれない。確かに、固定的に捉えられた民族をもとに政治を語ろうとすることは、今やあまりはやらない。しかし、この公開フォーラム²で検討したのはそのような意味での「民族の政治」ではない。むしろ、そのような民族理解を積極的に乗り越えようとする試みであると言える。

「民族の政治」と言ったときによくある誤解は、ある民族は同じ民族出身の政治家を支持する（したがって異なる民族出身の政治家を支持しない）というものである。この誤解の前提には、民族性は親から受け継ぐものなので生まれながらに決まり、生涯変わることがないという考え方がある。この理解に従えば、「民族の政治」では、人々が誰と協力し、誰と対立するかは生まれながらにして決まっていることになる。

マレーシアの「民族の政治」は、そのような理解とはまったく異なっている。マレーシアにおける民族とは、マレーシアという国（あるいは世界）に自分をどう位置づけるかという枠組である。現象だけ切り取って見れば、選挙の際にマレー人有権者が華人政党の華人候補に、華人有権者がマレー人政党のマレー人候補に投票することも珍しくない。民族文化に関することが常に政治上の争点になるということでもない。したがって、例えば、今回の選挙で争点になったのは民族文化なのか経済なのかといった設問は適切ではない。経済上の問題があるとき、民族という枠組を通じて解決をはかることが社会的に合意されている状況が「民族の政治」である。

このことについて整理するためには、マレーシアの「民族」が一般的に言語や宗教などによって規定される民族とは異なる概念であることを理解した上で、マレーシアでは「民族」が政治においてどのような機能を果たしているのかを理解する必要がある。半島部マレーシアでは、文化的共通性を持つと見なされる枠組ごとに相互扶助を行うという考え方が植民地の社会制度によって整形・強化されて社会に定着し、マレー人、華人、インド人の3つの民族の枠

組が形成された。独立に伴って議会制が導入されると、民族ごとに設立された政党がそれぞれの民族の庇護者となり、民族は「全国レベルの意思決定に代表を派遣する資格があると相互に認知された枠組」として機能するようになった。いわば、「資格としての民族」「権利としての民族」である。マレー人、華人、インド人は、いずれもその内部に目を向けると文化的に多様であり、文化的共通性はもはや中心的な意味を失っている。ただし、これらの枠組はマレー語で「民族」を意味する「バンサ」と呼ばれたため、民族ごとに母語や宗教があるとの主張や、言語や宗教を共有する域外の人々と「民族が同じ」とする主張が意味を持つことにもなった。

半島部では、民族別政党の連合体であるマラヤ連盟が結成され、独立直前の1955年に連邦総選挙で勝利して以来、今日まで民族別政党の連立政権が続いてきた。この50年間のマラヤ連邦／マレーシアの現代史は、住民を民族に分けた上で協同する「区切って繋がる」というあり方が、互いに異質性を認識しあう人々が自らの固有性を維持しつつ共存する上で有効であることを示すものであると言える。このように、社会生活のほとんどの面で民族の境界に沿って社会的な亀裂があり、民族の枠組によって自分たちの代表を選出して問題の調整や解決を図るのが「民族の政治」である。

これは、ある民族の有権者がそれと同じ民族の候補者に投票するという単純な話ではない。マレーシアは小選挙区制をとるため、1つの選挙区に与党の公認候補は1人しか立てない。ある選挙区の有権者が全員同じ民族に属するでない限り、有権者の民族性と与党候補者の民族性が一致しないことは珍しくない。例えば、ある選挙区で華人与党MCAの候補者がBNの公認を得たとすれば、BNの枠内でマレー人、華人、インド人の3つの民族が協力・連携しているという理解のもと、与党UMNOを支持するマレー人は、BNが公認するMCAの華人候補者に投票する。投票した人物の民族性と投票された人物の民族性だけを見ると異なる民族に投票しているが、BN体制下でこの有権者が社会生活上のサービスを求めるのはMCAではなくUMNOということになる。

このように、マレーシアは「民族の連邦」と呼べ

² 本章は、2008年5月4日、5日に京都大学で開催された公開フォーラム「『民族の政治』は終わったのか？——2008年マレーシア総選挙の現地報告と分析」での各報告と討論をもとに書かれている。

る制度によって民族間の共生を試みてきた。ただし、「権利としての民族」という表現に象徴されているように、民族として認知されるかどうかという問題は、マレーシア国民の一員として正当な権利が認められるかどうかという問題と直結しており、そのことによって生じている以下のような問題もある。

「公認の民族」と言っても、マレーシアに民族を認定する公の機関があるわけではない。マレー人、華人、インド人の3つは、マレーシアにおいて慣習的に民族として認知されている。過去に何らかの手続きがあったわけではなく、あえて言えば、相互に承認しあっているということになる。このことは、裏を返せば、既存の3民族以外の集団が民族として公認を求めても、公認される手段がないことを意味している。半島部には、シャム系、オラン・アスリ、ババ・ニョニヤ、ポルトガル系などのように、文化的独自性を維持している人々がいる。これらの人々は、一般的な理解では民族と呼べるかもしれないが、マレーシアの公認民族には含まれていない。公認民族をマレー語で「バンサ」と呼ぶことは上述したが、前述の人々は（自称ならともかく）バンサとは呼ばれず、「カウム」などと呼ばれる³。これらの人々は独自の政党を持たず、政治参加においてはいずれかのバンサの枠に入ることになる。マレー語以外の言葉を母語とし、イスラム教以外の信仰をもっている、バンサとしてマレー人の枠内に入れば、マレー人の利益を追求する政党を通じてしか自分たちの要求を国政レベルで表明することができないことになる。

サバ・サラワクの2州も類似の問題を抱えている。両州は半島部と異なる歴史的背景を持ち、マレーシ

³ これはマレーシアにおける社会通念を述べたものである。政治家や研究者には自覚的に「バンサ」や「カウム」に別の意味を込めて使おうとしている人もいる。例えばマハティール前首相は、『マレー人のジレンマ』のなかで、マレー人、華人、インド人をバンサではなくオランまたはカウムとしている（なお、同書ではマレーシア華人を *Orang Cina*、中国の中国人を *Orang China* と書き分けている）。1990年代以降は国家のスローガンとして「バンサ・マレーシア」が掲げられているため、「バンサ」が複数の意味で使われる場面が増えている。しかし、マレーシアで実際に人々と話してみれば明らかのように、今日のマレーシアではなおマレー人、華人、インド人の3つがバンサであると広く理解されている。

アの一員となった経緯が半島部諸州とは異なる。マレーシアの一員となった際に、半島部の公認民族の概念はサバとサラワクに十分に適用されなかった。そのため、サバ・サラワクにもマレー人や華人がいるが、国政に代表を派遣するうえでは、3つの公認民族の一員としてではなく、サバとサラワクという枠組を通じて行うこととされた。つまり、サバとサラワクは、どちらもバンサとは呼ばれなかったものの、働きとしては公認民族に準ずる枠組とされたことになる。しかし、サバとサラワクは州であってバンサではないとされたため、サバとサラワクの住民は自分たちが所属するバンサを持たないままになった⁴。同様に、移民や難民などとしてマレーシアに居住するようになった外国人も、所属する公認民族がないため、適切な社会サービスを政府に要求する経路を持たないという問題を抱えている。

他方、公認民族と認められた側にも問題がないわけではない。多様な人々を統合して1つの社会にする工夫として民族で区切った結果、公認民族どうしの関係は経験の積み重ねにより洗練されてきているが、公認民族内での同調圧力（マレー人はマレー人らしく、華人は華人らしく、インド人はインド人らしく）の問題や、それと裏表の関係にある異民族間の（あるいは公認民族とそれ以外の人との間の）通婚・混血への対応は十分に組み込まれていない。

このように「民族の政治」はいくつかの課題を抱えているが、その改善には2つの方向が考えられる。1つは、「民族の政治」の存在を前提として、問題が生じている部分に対応する方法である。具体的には、各民族内で代表の選出や相互扶助の仕組が十分に機能していないと見て、代表者を替えようとすることである。もう1つは、「民族の政治」自体に限界があり、それを解消すべきという考え方に沿った

⁴ 「民族の政治」において、サバとサラワクはバンサの地位が得られるかどうか1つの重要な争点であり、同じ「州」といってもサバ・サラワクと半島部の諸州とは枠組に込められた意味が異なっている。マレーシアの政治経済上の5つのブロックを「3つの民族と2つの州」とする言い方があるが、ここで「州」と「民族」は決して別個に存在しているのではなく、「州」には「民族」になりたいという思いがあるという理解のもと、本報告書では「民族・地域の政治」ではなく「民族の政治」と呼んでいる。

対応である。「民族の政治」が進むことで社会が発展して民族間の交流が盛んになると、国民全体を通じた価値観が求められ、「民族の政治」から「国民の政治」への脱却を求める動きが出てくることになる⁵。

2. 2008年総選挙の分析

以下では、本フォーラムの構成にしたがって、フォーラムでなされた議論を整理して紹介したい。

BN体制とは何か——仕組みと特徴

鳥居高は、基調報告「BN体制とは何か——仕組みと特徴」で、BN体制を「マレー人政党が優位にありながらマレーシア国民全体の政治参加が保障されているかに見せる擬制としての連立政権とその政治システム」とまとめた上で、マレーシアの選挙制度やBN体制について政党政治の展開を整理し、これまでの選挙でBNが勝ってきた理由をまとめている。マレー人が多数を占めるマレー人選挙区、華人が多数を占める華人選挙区、特定の民族が多数派を構成しない民族混合選挙区に分けると、従来の選挙では、マレー人選挙区と華人選挙区では野党が議席を多く獲得する傾向がみられるのに対し、BNは民族混合選挙区で議席を多く獲得してきた。

2008年総選挙を分析する視角として、鳥居は、(1)マハティール流の強いリーダーシップに慣れた国民のアブドゥッラー首相に対する不安感、(2)野党州政権の誕生などに見る1969年の総選挙との異同、(3)1969年の武力衝突事件を知らない世代が有権者の6割以上になっているという「記憶の政治」、そして(4)スルタンの政治的役割の4つを挙げている。

BN体制の変容？——マクロ政治からの視座

第1セッション「BN体制の変容？——マクロ政治からの視座」では、選挙データなどをもとに、比較政治の枠組で今回の選挙結果から何が読み取れるかを検討した。今回の総選挙ではBNの非マレー人野党

が惨敗していることから、華人とインド人に顕著に見られる与党離れをどのように理解すればよいか議論の中心となった。

鈴木絢女は、政党への支持・不支持が民族別に行われることを前提として選挙結果を次のように分析した。非マレー人有権者はBNの非マレー人野党(MCAやMICなど)と非マレー人野党(DAP)のあいだで投票対象を選ぶと考えると、今回の選挙では、UMNOがマレー人の権利擁護の面で急進化したため、非マレー人有権者はBN全体が急進化していると判断し、BNではなく野党を支持した。また、マレー人有権者は与党UMNOおよび野党PASとPKRの3党のあいだで投票対象を選ぶと考えると、今回の選挙でPKRはマレー人優遇策であるNEPの廃止を唱えたために中道政党と認識され、PASはイスラム国家樹立を掲げずにやや穏健化し、UMNOは上述のように急進化したため、3党の路線に大きな開きがなくなり、マレー人有権者にとっては争点がほとんどない選挙だった。

中村正志は、民族別に投票行動を分析する点では鈴木と同じだが、有権者が自分と民族性が異なる政党や候補者に投票する可能性(中村によれば「非亀裂投票」)を考慮に入れている点で異なっている。中村は、UMNOの後退の原因として、非マレー人有権者による非亀裂型の野党支持の増加を挙げている。また、非マレー系与党の後退の原因として、非マレー人有権者(都市周辺部)やマレー人有権者の非亀裂型の野党支持の増加や、非マレー人有権者(都市周辺部)の亀裂型投票の増加を挙げている。

金子芳樹は、今回の選挙について、華人やインド人の不満を代弁する役割を担うべきMCAとMICがその役割を果たしていないために非マレー人野党が大きく躍進したという「民族の政治」の枠組で理解できるが、それに加えて、NGOなど市民社会の展開が「民族の政治」によらない動きを支え、この動きが多民族野党であるPKRの台頭をもたらした側面もあると指摘している。

討論では、非マレー人(特に華人)がPASを支持するようになったかどうか検討された。UMNOとマレー人野党のあいだの選択になった場合、従来は華人有権者にとってマレー人野党(PAS)に投票する

⁵ 民族間の橋渡し役に関して、マレーシアでは宗教的な価値によって民族を超えて国民をつなごうとする試みもあるが、マレーシアの「民族の政治」では宗教も各民族の構成要素と捉えられてきたため、宗教的側面の強調が民族対立を招きかねないという問題もある。

選択はあり得ないと考えられていたが、今回の投票結果は華人有権者にとってPASへの投票があり得ない選択でなくなったことを示しているといった指摘がなされた。なお、民族別に投票行動を捉える場合、野党を民族別政党と見るか多民族政党と見るかが問題となるため、これについても議論があった。

UMNOの急進化という認識に関して、政策レベルでマレー人優遇政策が実際に強化されたとは考えにくいという議論と、それにもかかわらず非マレー人のあいだではマレー人優遇や改宗問題に見るマレー人側のイスラム化への警戒心が強まっているとの議論があった。マレー人や華人がそれぞれどのような課題を抱えているかについては第2セッションで扱われる。また、実際の政策と別に有権者がどのように感じているかが選挙結果に大きな影響を与えたという見方は、第3セッションで扱われるインターネットなどの新しいメディアの利用とも関連している。

BN 体制への対応(1)——民族別の改革の試み

第2セッション「BN体制への対応(1)——民族別の改革の試み」は、民族の枠組を維持した上で、民族ごとに何が問題となっており、解消がどのように試みられているかを、華人とマレー人について検討した。報告者はいずれもマレーシア大使館で専門調査員を務めており、日々の現地の動向の観察をもとに報告と議論が行われた。

篠崎香織は、華人与党の後退の背景として、社会サービスの担い手の多様化と、華人与党のBN内での監視機能の低下を挙げている。大きな政治的課題がなくなった1990年代以降、華人与党の主要な存在意義は華人社会と行政をつなぐ社会サービスとなったが、NGOなどが社会サービスに参入してきたために華人与党の優位が失われた。また、2005年頃からUMNOの一部がマレー人の権利擁護の面で急進化している事態に対して、BNの枠組はUMNOの監視や抑止のために機能していないとの認識が高まった。篠崎はこれらのことが有権者の華人与党離れを招いたと論じた。このことは、今回の選挙結果は一時的な与党離れにとどまらず、非マレー人与党の存在意義そのものが問われていることを示唆している。

多民族的な構成をとる野党連合PRが支持を拡大し、

一部の州でPR州政権が樹立された。しかし、篠崎によれば、PRは資源の公的配分にあたって民族性に基づく公平性を強く意識しており、たとえ特定の民族を優遇するBNのあり方を否定したとしても、民族別に対応する原理はPRにおいても維持されていると言える。

塩崎悠輝は、PASへの支持拡大の背景として、近年のPASに見られる路線の柔軟化を挙げている。PASは2003年に「イスラム国家文書」を発表してイスラム国家樹立を掲げた。しかし、このことが非ムスリム有権者の不信感を招いて2004年総選挙での大敗を招いたとの理解のもと、2005年以降はイスラム国家樹立を掲げることを控え、非ムスリムを含めた有権者の支持獲得のためのさまざまな手段を講じてきた。非ムスリムを主な対象としたPAS支援者クラブの設置や華語紙『人民時事』の発刊などがそれにあたる。2008年総選挙では従来のイスラム国家にかえて福祉国家を訴え、これらによってPASがムスリムと非ムスリムの別を問わず支持を伸ばしたと塩崎は論じている。

討論では、政党の機能としての社会サービスが議論された。1999年以降のNGOの伸張によって社会サービスが充実した一方で、インド人コミュニティではもともと与党MICが社会サービスで十分に機能していないことに加え、その不足部分を補うようなNGOがあまりなく、このことがインド人コミュニティの不満を蓄積させてきたとの指摘などがあった。

BN 体制への対応(2)——民族間関係の再編の試み

第3セッション「BN体制への対応(2)——民族間関係の再編の試み」では、民族性によらない関係性の構築や民族間の橋渡しによってマレーシア政治を再編しようとする動きとして、インターネットや携帯電話などの新メディアの役割と民族別政党をつなぐ新党の役割について検討した。

選挙後に各政党・議員がこぞってウェブサイトやブログを開設するようになったことに端的に表れているように、今回の選挙では携帯電話やインターネットという新しい形態のメディアが大きな影響を与えた。伊賀司の調査によれば、新聞・テレビなどの主流メディアはメディア規制法や経営形態などのた

めに与党の支配を受けており、選挙が近づくと主流メディアでは与党に偏った報道が行われる。しかし、いまマレーシアの人々は主流メディアを信用せず、インターネットなどの「オルタナティブ・メディア」を通じて情報を手に入れている。伊賀は、マレーシアにおけるインターネットの発展史を概観した上で、2007年のデモの様子や選挙演説が動画としてインターネット上で配信され、主流メディアでは得られない情報を人々が入手できるようになり、このことがマレーシア社会に大きな変化を引き起こしたと論じている。インターネットや携帯電話が生活に不可欠なものとなっている10代の若年層が有権者になることにより、この傾向は今後も一層強まることが予想される。

川端隆史は、マレー人と野党UMNOが権力闘争により分裂して新党が結成され、新党が橋渡し役となってマレー人野党PASと華人野党DAPが共闘する構図が繰り返されたことに着目して、マレーシアの政党政治史における「新党」の役割を考察した。川端は、新党の歴史を概観した上で、2008年総選挙における新党PKRを過去の新党であるS46党と比較して、アンワールを指導者としたことで野党の「つなぎ役」から「牽引役」へと変化したこと、S46党がマレー人擁護を掲げたのに対してPKRは多民族主義を志向していることなどの違いを挙げている。

川端は、今後のマレーシア政治の見通しとして、(1)野党間のイデオロギー上の隔たりが解消されていない以上、野党連合がBNに対抗する政治勢力となるの見方には消極的、(2)マハティール首相の引退に伴って野党の政治目標は反マハティールから民族間の資源配分に移っており、今後プミプトラ政策のあり方が政治的争点になる、(3)マレーシア政治におけるサバ・サラワクの重要性がますます高まり、サバ・サラワクの理解抜きにマレーシア政治が語れない状態になる、(4)PKRがマレー人政党色を薄めることで、自らをマレー人の庇護者と見るスルタンとの関係が悪化する可能性があるとの4点を挙げている。

討論では、インターネットなどのオルタナティブ・メディアが何をもたらしたかが議論された。動画を通じてできごとを実際に目にすることによる実感や、国境を越えて世界の人々に見られている意識

を与えたことなどの重要性が指摘された。また、与党連合BNがNasional (Nation)という言葉を用いているのに対し、野党連合PRではRakyat (People) が用いられていることの意味も検討された。Rakyatは「人民」とも訳され、これまでしばしば左派政党の党名に使われてきたとの指摘や、マハティール首相の演説ではRakyatが事実上「国民」の意味で使われていたとの指摘があり、さらにフィリピンなど近隣諸国におけるピープル・パワーとの連携の可能性も指摘された。このほか、今回の選挙で見られた民族性を超えた投票行動について、民族の枠組でマレーシア政治を考える時代が終わり、政治面で「マレーシア国民」が実現しているとの見方について議論が行われた。

「地方の論理」をどう読み解くか

第4セッション「『地方の論理』をどう読み解くか」では、「民族の政治」の文脈から半ば切り離された形で非主流扱いされてきた地域における選挙と政治の展開について、トレンガヌ、サラワク、サバの3つの州を事例に検討した。これらはマレーシアで石油を産出する3州にあたる。トレンガヌとサバでは過去に野党が州政権を担当したことがあるが、今回の選挙ではいずれもBNが勝利をおさめた。

河野元子は、マレー人の人口比が全国一高いトレンガヌ州を扱った。トレンガヌは、野党PASが州政権を維持しているクランタン州に隣接していることもあり、PASの影響力が強い。1999年にはPASが州政権を掌握し、2004年にはBNが州政権を奪回した。今回の選挙では、半島部のいくつかの州でBNが州政権を落としたのと対照的に、トレンガヌではBNが州政権を維持した。

PASは1999年の州議会選挙では58%の得票率で88%の議席を得たが、2004年には43%の得票率で13%の議席しか得られなかった。これは、小選挙区制で死票が多いため、わずかの票の動きが大きな議席の変化をもたらすためである(2008年の選挙では45%の得票率で25%の議席)。わずか十数パーセントの変化で政権交代が起きている状況を踏まえ、河野はトレンガヌ州をいくつかの地域に分けてUMNOの開発戦略と投票行動の関係を分析した。

トレンガヌでは石油ロイヤルティが1970年代半ばから州財政に入るようになり、これが州財政の7～8割を占めるにいたった。経済は成長したが、その恩恵に与れる人とそうでない人の間で格差が生じた。トレンガヌ州を北部農村部、州都近郊、農村部、南部にわけると、州都近郊では与野党が拮抗しているのに対し、南部の油田地区やUMNOが村落開発プロジェクトを進めた農村部では与党が高い支持を得ている様子が明らかに見てとれる。

森下明子は、2008年の選挙運動期間中にサバとサラワクで現地新聞の記者に同行するという貴重な経験をすることを得て、その見聞をもとに現地の様子を報告した。インドネシア（カリマンタン）の政党政治を専門に研究してきた立場から、森下は、選挙運動期間中にBN候補の当選が危ぶまれていた選挙区がいくつも挙げられ、それにもかかわらずサバとサラワクで与党が圧勝したのは与党側による操作があったためとの新聞記者の見解を紹介している。

山本博之は、マレーシアの「民族の政治」のなかでサバがどのような位置に置かれているかを整理し、1980年代から90年代にかけてのPBS政権時代の「サバ人のサバ」を、公認民族の地位を得ようとする試みとして理解すべきと論じた。山本は、サバにおける選挙や政党の意味を論じたうえで、今回の選挙でのサバにおけるBN圧勝は半島部BNによるサバ支配の強化には結びつかず、むしろ選挙後にはサバの独自性が強まる傾向があり、サバのBN構成政党の一部はいつでも野党連合PR支持にまわりうるとの見解を示した。

討論では、サバのBN政党やBN議員が野党支持にまわる可能性が議論された。半島部と違ってBN対PRという対立関係の中になくサバやサラワクの政治家にとって、連邦の与野党間を移籍することに大きな抵抗がない。そのため、状況や条件しだいではサバやサラワクのBN議員がPRに移籍することも十分に考えられる。ただし、BNでも政権の維持と強化のために可能な限りの手段をとると考えられるため、BN議員のPRへの移籍がただちにPR政権の誕生をもたらすわけではないことも指摘された。

また、サラワク政治の分析枠組に関して、かつては大きな川の流域ごとに分析する方法が有効だった

が、近年ではダム建設や伐採道路などによって人やモノの移動の経路が変化し、サラワク政治の分析枠組に変化が生じている可能性があることが指摘された。

総合討論——「民族の政治」の再編の可能性

総合討論では、今回の選挙結果の原因について、限られた情報をもとにした議論であるという留保付きで、次のように議論をまとめた。1990年代、マハティール政権下のマレーシアは民族融和の方向に向かい、民族的な利益の主張は政治上の主な争点にならなくなってきた。そのため、政党は社会サービスを提供する役割が重要になったが、野党やNGOなどの参入により、与党は社会サービス提供者としての優位性が失われた。

民族融和が進むなかでマレー人は「マレー人らしさ」を模索し、その拠り所の役割を担わされたのがイスラム教だった。マレー人は穏健なイスラム教を想定したが、非ムスリムにはこれがイスラム化の強化と映り、非マレー人の警戒心がBN離れ（UMNO離れ）をもたらした。

政府は必ずしもマレー人優先政策を強めてきたわけではないし、イスラム化の強化を求めているわけでもない。しかし、ここで重要なのは、問題となるのが行為者の意図ではなく受け手の理解である点である。その際に、インターネットのような新しいメディアが、人々が現政権に批判的な意識を形成する上で重要な役割を担った。

「民族の政治」に関する議論は、大きく次の3つにまとめられる。

1つ目は、「民族の政治」のゆくえに関する議論である。選挙後のマレーシア政治がどの方向に向かうのかはさまざまな可能性が考えられ、いくつかに絞ることは難しい。それでも可能性だけを挙げるならば、一方の極端な考え方として、有権者のBN離れは一時的なものに過ぎず、「民族の政治」がほぼ現状のまま続くシナリオが考えられる。何らかの形でBNのなかに華人政党とインド人政党が再構築されるか、あるいはアブドゥッラー首相の退陣によりBNへの支持が戻るか、具体的な形はいろいろありうるとしても、従来のBNが修復されて機能を回復するというシナリオである。これに類似したシナリオとして、

機能不全に陥ったBNにかわって野党連合PRが民族別の代表制を維持したまま連立政権を担うというシナリオが考えられる。その場合、マレー人を優位とする民族間関係とはやや異なる形をとりながらも、民族別の代表制が維持され、「民族の政治」の枠組は残る可能性が高い。この2つと反対の極にあるのが、「マレーシア国民」（バンサ・マレーシア）が形成されている可能性である。マレーシアの人たちにとって、文化的・象徴的な意味としての民族は意味を持ち続けても、政治経済面ではすでに民族の枠組は重要でなくなっており、民族別政党は存在意義を失っているという見方である。この2つの両極の間にいくつか中間的なシナリオがあり、現実には中間的なシナリオのいずれかとなるであろう。その際には、民族にかわって半島部でも州の機能が実質化していく可能性も考えられる。

2つ目は、ブミプトラ政策抜きの「民族の政治」の可能性である。民族別に管轄を決め、各民族の代表は各民族が決めるという「民族の政治」自体には意義があると思われるが、マレーシアでは「民族の政治」はマレー人を優先するブミプトラ政策と裏表の関係にあり、これまで両者を切り離して考えることはほとんどなく、「民族の政治」はしばしば非マレー人に対する民族差別と結び付けて理解されてきた。今後ブミプトラ政策が見直され、仮に撤廃された場合、それによって「民族の政治」が幕を閉じる可能性もあるが、むしろ「民族の政治」がブミプトラ政策抜きで維持されるという可能性も考えられる。

3つ目は、マレーシア政治の分析枠組の再検討に関するものである。今回の選挙は、マレーシアの政党をすべて民族別政党と見て分析しようとする従来の見方への再検討を迫るものとなった。与党では、マラヤ連盟時代からの与党であるUMNO、MCA、MICの3党は民族別に党員資格が定められているが、それ以外のBN構成政党は党員資格を民族別に定めず、登録上は多民族政党である。党執行部や党員に特定の民族が占める割合が高く、したがって特定の民族の利益を代弁するような立場をとる傾向もあるが、実態としては特定の地方を主要な基盤として多民族の支持を得ている比較的小規模の政党が少なくない。また、野党は特定の民族に党員資格を限

らず、登録上はいずれも多民族的な構成を維持している。いずれの野党も執行部や党員の多くが特定民族に偏っており、特定民族の利益代表として見られているため、これまで事実上の民族別政党と見られてきた。

しかし、これらの政党は、民族別政党としての性格とともに多民族包括型政党としての特徴も併せ持っている。「民族の政治」の枠組にあるときは民族別政党の顔を見せているが、実際は状況に応じて両方の顔を使い分けている。

これらの政党を民族別政党と見るのか、それとも多民族包括型政党として見るのかは、マレーシア社会をどのように見るか、ひいてはマレーシア政治をどのように分析するかという問題と直結している。具体例を挙げれば、PKRを多民族政党としながらも分析の際にはマレー人政党とするなど、今回の選挙分析では多くの報告者にPKRの位置づけに苦慮した跡が見られる。しかし、旧来の民族別政党の枠組に当てはまらないかもしれない存在を旧来の枠組で分析している限り、今回の選挙でもたられざるマレーシア政治の新たな状況を有効に分析したことにはならないだろう。今回の総選挙を境にして、マレーシアの与野党を民族別政党とのみ見ていけばよい時代は過ぎ去ったと言えるかもしれない。

むすび

今回の選挙結果がマレーシア政治に与えた最も大きな変化を挙げるとすれば、半島部の西海岸諸州で野党州が誕生したことだと言えるだろう。これらの野党州は、仮に野党連合PRが将来国政を担当することになった場合、その予行演習として位置づけられるものとなる。それが半島部の西海岸諸州で行われていることが重要な意味を持っている。

これまで半島部で野党州がなかったわけではない。クランタンではPAS州政権が続いているし、トレンガヌでもPASが州政権を握ったことがある。しかし、これらの2州はマレー人の農漁村が大半を占める半島部の東海岸に位置し、例えばPAS州政権がイスラム教の価値をもとに公共の場での男女の隔離などの政策を唱えても、それ自体は大きな問題となっていない。これに対し、今回の選挙では、工業化が進ん

で華人や外国人が多く住む地域を多く含む西海岸のクダ、ペナン、ペラ、スランゴールで野党州政権が誕生している。マレーシアの経済的安定を考えるならば、これらの州で多くの住民に不安を与えるような極端な政策をとることはできない。その意味で、PRの構成政党には「現実路線」への圧力がかかることになる。

選挙直後から、サバやサラワクのBN議員のPRへの引き抜きや半島部でのBNとPRの議員の引き抜き合いのうわさが絶えない。今後何らかの形で政界再編が進み、場合によっては国会での与野党の勢力が逆転して、BN政権にかわってPR政権が誕生する可能性も十分に考えられる。しかし、西海岸諸州でPRが政権担当の経験を積むことで、政界再編や政権交代が起こってもマレーシアが大きな政治的混乱に陥ることはないだろう。

このことに関連して、与党連合の歴史的な大敗という事態に対して、超法規的措置による対応がなされていないことを指摘しておきたい。マレーシアを知る者にとっては常識の部類に属するためにこのフォーラムではまったく言及されていないが、近隣諸国と異なり、マレーシアでは政治的な混乱に際して軍部が出てきて解決を図ろうとすることはない。仮にマレーシアで政治的混乱を收拾するための超法規的措置が取られることがあったら、国王の名による非常事態宣言ということになるだろう。実際、1969年には総選挙で与党連合が今回と同じくらいの大敗を喫し、選挙後のマレー人と華人の衝突を契機に非常事態宣言が出されている。国会と憲法が停止された状態で、与党連合がBNに再編されて政権が安定したところで憲法と議会が再開された。ただし、マレーシアの国王は象徴的な存在であり、政治勢力の1つとして自らの意思で国政への介入を狙っているわけではない。また、今回の選挙後の新聞等による調査を見ても、国王の国政への介入に対しては消極的な声が多い。何よりも、1969年に非常事態が宣言される原因となった暴動が今回の選挙では発生していない。それは、今回躍進した野党がマレー人を多く含む多民族政党だったために与野党の対立がマレー人对非マレー人という形をとっていないことに加え、政治的立場の違いを実力行使によって解消し

ようになると自分と相手の双方に大きな被害が出ると（半島部の）マレーシア人が十分に理解しているためであると考えられる。野党有力者の逮捕などを契機に野党支持者が騒乱を起こして口実を与えるのでもない限り、非常事態宣言の発令によって政局の混乱を收拾しようとする展開になるとは考えにくい。

政権担当能力を持つ2つの政治勢力が育つ契機として見るならば、政局の先行きは不透明だが、中長期的に見た場合、今回の選挙結果によってマレーシアの政治はより成熟した方向に一歩進んだと見るべきだろう。今回の選挙では有権者の行動が予測できなかったため、半島部の政治家、とりわけBN党員は厳しい思いをしているかもしれない。また、研究者にとっても、どの政党も民族別に色分けして見れば済んでいた時代が終わり、マレーシア政治を理解する枠組の作り直しを余儀なくされる可能性があるため、今回の選挙結果は悪夢かもしれない。しかし、政治家や研究者に理解や予測が難しくなったからといって、そのことをもってマレーシアの政治が混沌に向かっていると評価するのは適切ではないだろう。その先にどのようなマレーシアが現れるのかは未知数だが、その未知数は人々に不安感を与えるものというより、人々のさまざまな期待が込められた可能性の広がりを持っている。マレーシアでこれまで「常識」とされてきたことが覆り、「もう1つのマレーシア」が現実となる日が来るかもしれない。いつごろ、どこまで「常識」が覆るかを予測することはできないが、「民族の政治」に絡めて言うならば、イスラム教徒でないマレー人の存在が社会的に認められる日がやがて訪れることも、決してありえない話ではないだろう。